星槎大学紀要（Seisa Univ. Res. Bul.）共生科学研究 No.16　150～152（2020）

書　評

『コンゴ共和国　マルミミゾウとホタルの行き交う森から』増補改訂版
（西原智昭著　現代書館）

保屋野　初　子

究極のフィールドワークとはこういうものか。死にかけたエピソードがいくつも登場する。乗っていたセスナ機が森林上空で燃料切れ、森林伐採会社の旧飛行場草地に不時着する場面がプロローグだ。マルミミゾウの鼻に巻かれ空を振り回されたが無事に下ろされた体験、コンゴ内戦では首都脱出や仲間救出、現金を守るべく奔走するなど、数々の緊迫場面が披露される。さまざまな虫との遭遇もなかなか壮絶だ。ところが著者と仲間たちはいつも無傷。強運はフィールドワークに必須なのである。わけても危険と隣り合わせの辺境の地のそれは、結果的に無事ならば醍醐味となる。だが、それがフィールドワークの本質ではない。よく読めば、そうした幸運も偶然ではなく、兵站のごとくよく準備された計画、予測して先手を打つ行動、逃げる技や機転など、日々の現場での経験に裏打ちされた知恵と勘が呼び寄せるものなのだとわかる。

本書は、著者が京都大学大学院時代の 1989 年から 2019 年までの 30 年にわたるアフリカ中部、コンゴ共和国の熱帯林を中心としたフィールドワークの体験記録であり、日本に住む私たちへのメッセージである。最初の 10 年は研究者として、残り 20 年はアメリカに本部を置く野生動物保護 NGO、WCS（Wildlife Conservation Society）スタッフとしての活動に基づいている。その多くを森の中で過ごした著者は、京都大学前総長・山極寿一氏をして「野生生物と人間の境界に立って地球を見渡せる人は数えるほどしかいない」（著書推薦文）と言わしめる、稀少なアフリカ熱帯林フィールドワーカーである。

コンゴ共和国は 1960 年にフランスの植民地支配から独立し、34 万 2,000 km^2 に人口は約 540 万人（2019 年）。日本より 1 割ほど小さい国土に日本の人口の 4.2％という人口の超低密度は、広大な熱帯林があるためでもある。国の中央を赤道が横切り、カメルーン共和国と中央アフリカ共和国にまたがる北部地域に原生的な熱帯林が残り、世界自然遺産と各国の国立公園に指定されている。最も広い 4,000 km^2 のヌアバレ・ンドキ国立公園が著者のフィールドだ。この熱帯林は東南アジアや南米の「熱帯雨林」と異なる「熱帯林」であることを、筆者はこの本を読んで初めて知ったと告白しておかなくてはならない。日本では「ジャングル」の代名詞程度しか知られていないのが普通かもしれないが、アフリカ中部熱帯林は、京大を中心とした日本人研究者の長期調査によってゴリラ、チンパンジー、ボノボなど霊長類とヒトとの違いや近さに関する世界的な研究成果を生んできたフィールドであり、その知識の一

星槎大学共生科学部

部は私たちも聞き知っている。本書の後半では、アフリカの熱帯林と日本人との「隠れた関係」も明かされていく。

京大調査隊の一員としてンドキの森で調査することになった1989年が著者とアフリカとの出会いだ。当時のンドキの森はまだ手つかずの原生熱帯林が残り、先行研究が少なく生息するニシゴリラの生態も明らかになっていなかったことから、著者はンドキの森のゴリラを研究対象に選ぶ。しかし学術上のこの理由のほかに、「ゴリラは歌を歌う」というゴリラ研究者の伝聞を読んだことを挙げている。「『音楽の起源』について何かわかるかもしれない」と。筆者には正直なところいまひとつピンとこなかったのだが、全編を読み通したところで、なんとなく気がついたことがある。

どうやら著者独特の感性や物語がところどころで立ち現れ、実利よりは情動が優勢となり、わが道を進んで行ったのではないかと。第1章の、「……明かりのない闇夜のキャンプを照らす三日月。樹冠の間から垣間見える澄み切った夜空の星々。まるで人工衛星のように高い木々の間を渡っていく無数のホタル」は、エピローグに再登場するホタルと呼応する。「……そのときの心地よい夜気。聞こえてくる虫の音。樹冠の間から光をのぞかせる星たち。そして、空高く舞うホタル。先住民の話し声はほとんど気にならず、むしろ自然界の音楽のように流れていた」。こうした感性が研究者の道より保護活動家を選択させたのだろうか。

長期的なフィールドワークを通して深めていったゴリラ、マルミミゾウ、かつてピグミーと呼ばれていた狩猟採集先住民など「野生」「野生的な生」への評価と愛情。ゴリラに対しては、「静かな気性で大きな体躯（旧字体）を持った、われわれ人間の近縁種。不器用だが、きれい好きで、隣のグループ同士ともいたって友好的なゴリラ」と愛情を隠さない。著者たちの野生動物の観察は主に森の中の「バイ」と呼ばれる湿地性草原で行われるが、バイでゴリラの群れは日本人が湯に浸かっているかのように気持ちよさそうに過ごす。広域に動き回るマルミミゾウはバイで水とミネラルを補給し、そこに通うために森の中にゾウ道を造成し、他の動物や調査者も利用する。また、移動しながら食べた果実の種子を糞とともに散布するので森の植生を再生する役割も担っている。マルミミゾウはアフリカの熱帯林で重要な生態学的役割を果たす「礎石種」なのだという。森について深い知恵をもち平等社会を維持してきた狩猟採集先住民のガイドなしに森の調査は成り立たない。そうしたものたちを育む熱帯林を守りたい、という情動が著者の原動力になっているのである。

しかしこの30年間にンドキの森は切り拓かれ切り刻まれてきた。人口増と畑作地の拡大、経済発展のために外国資本に許す森林伐採業や鉱物資源開発、それにともなう道路網の拡張。道路網は次の破壊を引き寄せる。象牙採取のためのマルミミゾウの大量殺戮、世界ペット市場に供給される野生ヨウムの大量捕獲、ブッシュミート（野生動物肉）ビジネスの急拡大など。ゴリラは格好の肉供給源にされるといい、今や絶滅危惧種に指定されている。

日本人も深くかかわってきたものがあると知らされた。2007年の統計では日本は商社を通したアフリカ熱帯材輸入の上位国であったし、中国とともに印章（ハンコ）用象牙の主要輸入国でもあった。三味線の象牙製バチは日本独特の用途で、著者など環境団体の働きかけで代替素材開発が試みられているという。野生ヨウムは年間400～500羽が日本に輸入され

ペットショップに並んでいた時期があった。そうした需要や個人の欲望の供給源となっている現地では、野生の周辺で生きてきた人々にも貨幣経済が浸透し「少しでもお金がほしい」がために森を壊す賃金労働や違法行為にも従事せざるをえない。グローバルな取引の末端と末端は、このように互いに相手を知らないものだ。消滅したり刻まれる熱帯林からは財や富と引き換えに、望まないものも現れ出る。エボラウィルスのような病原体が宿主以外の野生動物に乗り移り、ブッシュミートなどを通じて人間へと広がっていく。新型コロナウィルスについても同様の見方がある。

著者は、地球温暖化の主因は森林破壊にあると言い切る。通説との関係が説明されているわけではないが、残りわずかとなった原生熱帯林の大々的かつ急激な破壊と減少は、「予期できない、とてつもないことになるのではないか」という畏れを誰にも抱かせる。なぜなら、熱帯林は人類のふるさとなのだから。日本で毎年起きるようになった大規模水災害、コロナ禍の苦難など。それらが遠いアフリカ、アマゾン、東南アジアの熱帯林で繰り広げられる経済活動という名の破壊行為から巡り巡ってやって来ているのだとしたら……。熱帯林開発の恩恵を無意識に受けている私たちへの因果応報というべきなのだろうか。この本は 2018 年初版の増補版として 2020 年 3 月に上梓された。ちょうど Covid-19 パンデミックが始まった頃。その災禍は地球規模となり今日も拡大を続けている。

「環境問題は人と人の問題である」は、共生を科学する星槎の環境の学びの基本にある見方である。星槎大学特任教授となった著者には、アフリカでの 30 年にわたるフィールドワークに基づいた人間や社会のあり方、自然とのかかわりを日本で広く伝えていってほしい。